

小説を書くことと読むこと

古 山 高麗雄

古山高麗雄です。皆さんの中には現に小説を書いたりしている人もいらっしやるでしょうし、将来書こうと思っている方もいらっしやるでしょう。皆さんは文芸科ですから、他の科の学生さんよりは小説をいろいろ読んでいらっしゃる方々と思います。さて今日は「小説を書くことと読むこと」という演題にしましたが、要するに私にとって小説とは何であったか、いま何であるかといったようなことを、体験的にお話して皆さんの御参考にしたいと思っております。

小説といいますがいろいろあります。私のやっておりますのはいわゆる純文学といわれる小説ですが、小説はそのほかいろいろあります。たとえば、エンターテイメントの小説があります。推理小説というのも、家庭小説というのもあります。SF小説というのもあります。その中で私が小説というのは、自分のやっております純文学のことです。

純文学という小説の分け方は日本独特のもので、外国ではそういうものとしてとらえておりません。日本人は純という感覚が大変好きな国民なんです。最近はおまわりいわれなくなりましたけど、喫茶店なんかでも純喫茶なんてネーミングがありました。私が皆さんぐらいの年ごろのころにはコーヒー、紅茶、ジュース、そういうもの

のだけを飲ませる喫茶店は純喫茶で、ビールなんか飲ませる今のスナックのような店は純喫茶とはいわなかったんです。

純文学もそういう感覚で考えられているのでしよう。幅狭く、まがいものない小説というものが考えられているのです。でもこの区分は、かなりあいまいな区分けであって、そういう考え方がいいかどうかわかりません。また、この純文学をやるにしても、それを職業としてやるか、職業でなくてやるかということ、小説との取り組み方が変わってきます。考えてみると私には、小説なんていうものが商品になるというのはどういふことかよくわからない。特に純文学というのは食っていくためにやってゆく素材として適当であるかどうかわからない。

いわゆる純文学作家でかなりの収入を得ている方が何人かいらっしゃいますけれども、これは特別なことでして、小説では食えないのが普通だと私は思っています。いま日本文芸家協会に会員が千三百人ぐらいいりますが、原稿料だけで何とか生活している人はその中の三分の一だけといわれています。他の方はみんな学校の先生などをやりながらお書きになっているんです。

そういうものを私はなぜやるのか、なぜやって来たのか。と言ひ

ますと、私は今度の八月（昭和六十一年）で六十六になるんですけど、私が皆さんぐらゐの年ごろのときには、日本は第二次大戦に突入したころ、あるいは突入する直前でした。そのころの話はあなたの方のお父さん、お母さんはなさっているでしょうか。人によつて全く子供に話さない親も、やたらに聞かせる親もいらつしやるようですが、そのころは、今みたいな自由な世界ではありませんでした。今から考えるとウソだつていわれそうなくらいおかしな世の中だった。大体日本人は他人の事にやたらに干渉する、お節介をやぐ、そういう傾向の強い民族だと思います。

戦後「関係ない」とつて言葉がはやつて、今でもよく使われますが、「関係ない」というのはいい考え方で、他人のことは他人の自由です。互いにそう考えればいいところをそう考えない。そういう考え方が日本人には非常に乏しい。人のことが気になつて気になつてしょうがない。そういう性格ですから、国全体が一つの考え方にまとまつて行く傾向が非常に強い。国全体が一つの考え方にまとまつてゆくというのはファシズムです。それに素直に従つてゆける人もいるでしょうけれども、しかし日本人の中にもそれに乗れない人がいる。私はそれに乗れなかった。当時は皇国史観といひますか、天皇は現人神であつて、国民はその赤子である。戦争には必ず勝つて、危ないときには神風が吹く。日本はそういう国で、国民はお国のため、天皇のためには一命を投げ出さなければならぬという考え方に国全体がまとまらなければいけないと押しつけられていた時代でした。

江戸時代に生類憐れみの令が綱吉の時代に発令されて、小鳥の巢を誤つて木から落したとか、犬にけがさせたとかいふことで罪

になつた時代があります。私が若いころはそういうおかしな時代と大差のない時代だつたと思います。

バスに乗つても、皇居（当時は宮城といひました）や明治神宮の前を通るときには、お客がみんな立ち上がつて車掌の号令でおじぎをする。政府が軟弱なことと決めたものはすべていけなかつた。英語は敵の言葉だからということを使うことは禁止され、野球の用語も全部日本語になりました。ミスワカナという漫才師がいたんですが、そのミスがいけないという国の指令で名前をメスワカナと変えさせられた。当時流行した歌謡曲の「島の娘」というのに「娘十六恋ごころ」という歌詞があるんですが、警視庁、文部省あたりが、十六で恋をするのは早すぎるから「娘十六紅だすぎ」と変えろと、歌の文句まで変えさせられてしまつた。そんなバカな政治ということとを皆さんは考えられないと思ひますが、現実にはそういうことがあつたんです。

私の青春時代というのはそういう時代でした。学校にいつても、先生が都合悪くて休講になる。で、近所の喫茶店でコーヒーを飲んでいたりすると、授業に出ずに怠けている非国民だといひるので警察に連れてゆかれた。現にそういうことが毎日行なわれている時代だつたんです。それを正しいと考えるわけには行かない。しかし反抗するといつても、とても相手が強くて反抗し切れない。うっかり反抗すれば憲兵隊とか警察の特高につれてゆかれて拷問されたり、なぐられたりしました。

そういうときに自分が自分であるためにはどうすればいいかといひえ、自分の考え方、自分のもののかみ方、これをしっかり持つことでした。それ以外に何の頼りになるものも世の中にない。徴兵

制度があつて、国民は全部兵隊にならなければいけなかつた。兵隊になつたら、自分の意志にかかわらずどこかへつれてゆかれて、そして死ぬかもわからない。そういう状況の中で生きるためには、これが自分だというものを育ててゆくしかなくなつたわけだ。

けれども、それは何もそういう時代でなくても、今の皆さんも同じではないかと思ひます。自由ということが僕たちの時代には、ものすごく刺激的だつた。ないから欲しかつた。それを何とか手に入れようとした。今は大變自由な世の中です。しかし、皆さんが自分の生き方を生きるということにおいては、ファシズムの暗黒時代といわれていた私たちの若いころと今と、本質的には同じかも知れません。しかし私は、そういう状態の中で、あらゆるものを奪われた感じになり、最後に、自分はいかに生きるかということしか自分にはないのだという思ひになつたのです。

文学、純文学の目的といひますか、何のために小説を書くか、何のために小説を読むかという、結局は人生をどう把握するか、生き方をどう把握するか、人間をどう認識するか、最後はそこへいつてしまふんです。それを考えること、書くことで追究することが、私が小説を書く理由です。やらずにはいられません。要約すれば、いわば、いかに生きるかということです。しかし、それはいきなりそこにいくんではない。人間はいろいろなものを持っています。人間の中には虚無的なものもある、醜いものもある。美しいものもあるし、夢もあるし、ウソをつかずにいられない心もあります。そういうものがある人間を、自分のなかに把握するためには、美しいものとは何か、醜いものとは何か、虚無的とはどういうことか、でたらめとはどういうことか、いちいちそういうことを突きつめてい

かなければならない。そういうことをやって最後にたどりつくのは何かといへば、結局は人生とは何か、人間とは何か、最後にはそこにたどりつくわけです。

ところがそこへたどりつけるかという、なかなかたどりつけない。考えても考えても割り切れない。まるで一を三で割るように、人のこと、人生のことは〇・三三三三……と割り切れないでいつまでも続きます。無理に結論出してみたつて結論にならない。一応格好をつけた答えが出るだけで、答えが出ないからいいかげんにしていいかという、そうはいかない。何かそんなわけのわからない状態のなかで、ものを求めたり、断念しながら生きてゆくのが、人間の生き方だろふと思ひます。

最近、小説は男性よりも女性の方が一般的にすぐれた作品を書く人が多くなつてきているようですけれども、私は当然といへば当然という気がしています。大体、男というのは女性ほど人生のことを考えません。どうすれば会社で取引きがうまくゆくか、社内の人間関係がうまくゆくか、そういうことは考えますけれども、美とは何かとか、愛とは何かとかは、男はあまり考えないんですね。

ところが、女性は男性よりも一般に暇もありますし、お父さんの方はお金を運ぶばかりで、あとはお母さんに任せっきりというものが、男女同権といわれる世の中になつても、日本の家庭の形です。お母さんの方は赤ちゃんを産むし、子供の将来のことなんか毎日毎日お父さんが考えるよりも考える。そういう立場に置かれた人が、小説というのを書いて当然だという感じがしますなあ。

ただ、それを職業とするということになると、話はまたちがってきます。人には表現欲というものがあつますし、自分の思ひを發表

したいという欲望があります。私は戦争に反対してドロップアウトしながら、しかし軍隊から逃げることもできずに戦争にいつて、運命のいたずらといいますが、戦犯容疑者に指名されて、サイゴン監獄に一年ばかりほうり込まれました。結局裁判の翌日に釈放されて、大したことはなかったんですけれども、入っているときには自分の将来がどうなるか全く見通しもつかず、憂鬱な苦しい環境に一年ばかり過ごしたわけですが、そういうところでは、みんな詩を書いたり、短歌を作ったりするんですね。それは人間の自然の姿かと思いました。人間は苦しくなると、歌をうたうんです。しかし、苦しくなくても人は歌をうたいつづねなければいけないんじゃないでしょうか。

あらゆる人が詩を作ったり、小説を書いたりするわけにはゆかないけれども、人はみんな詩の心を持っているんです。いいもののある自分の世界を持たない人間というのはつまらないし、それを持たない人の多い国というのはいい国ではない。日本は経済大国といわれるような金や物の豊かな国になりましたが、やっぱり一人一人の人間が魅力的でなければつまらない。そういうことは、人々はみんな、心の中のどこかで知っている。そして、その魅力というのは皆さんが自分自身の中で考えて行くものなので、小説というものはそういう自分のために、売れるとか売れないとかにかかわらず、書かされるべき要素を持っています。

私は曲がりなりにも原稿料で食べてますけれども、いわゆる純文学というのはそれで食えなくてもいいんです。小説は、自分の中の読者のために書くものなので、自分の中の読者というものが他の人と通じたときに、他の人にも読んでもらえるわけなんです。それで

いいのです。他の人に読んでもらえないときには、自分の中の読者に読んでもらえばいいのです。そういうものは職業として成り立たなくてもいいのです。

しかし、エンターテイメントなんかでたいへん売れている作家というの、同じ小説家でも考え方が違います。読者にアピールする、商品として受けるものを書ける技術を身につけなければならぬ。というように小説といってもいろいろあるわけなんです。私は私の道をいまままでトポトポと歩いて生きてきただけで、そういう自分を立派だとは思わないし、つまらないとも思わない。また、そういう自分を人に押しつけようとも思わないし、ひけらかそうとも思わない。こうやって来るしかなかったし、こうやって死んでゆくしかないんだと思っています。

これから皆さんも、小説を書いたりするときがあるかもしれないが、小説というのは、人によっては地味な自己修煉であって、非常にまじめなものなんです。自分自身と同時に、他人をどう把握してゆくかということ、試行錯誤をかさねながら少しずつつ進めてゆくことなんです。そういうことは無意味な仕事ではないということだけは言えると思います。自分で小説を書いて、読んでみたら自分の中の陰気なもの、いやらしいものすべてがそこに出てきます。それを謙虚に受けとめて、自分の人生の中にある赤い花を見つけた。そのために、さてどうすればいいか考える。私にとって小説を書くということはそういうことです。

小説を読むということも、結局は同じ事ではないでしょうか。私は全く活字になる当てのない小説を二十歳ぐらいのときには書こうとして書けなくて、それで戦争にいつて戦争から帰ってきました。

私は芸術至上主義者ではありません。小説なんていうのは、家庭を犠牲にしたり、家族を飢えさせたりしてもいいほどしがみつかなければならないものとは思っていません。だから戦争から帰ってきて、書きたい気持はありましたけれども、二十五年間ばかり書けませんでした。安月給にしがみつくのが精一杯で、小説なんか書く余裕がなかった。しかし、月給は安かったけれど、ずっと編集という仕事をやっていました。編集って仕事はなかなか面白いんです。いろいろ面白い人に会えるし、生活には変化があるし、クリエイティブな部分もあるし、こんなおもしろい仕事につけたんだからもういいじゃないか、そんな気持になっておりました。おれは傑作を書くんだから少々の不便や貧乏は我慢しろなどという気持は全然持っていません。

ところが『季刊芸術』という雑誌を編集していたころ、その雑誌の同人の江藤淳さんが小説を書け、書けというもんですから、それじゃというんで書いたのが「墓地で」という私の初めての作品でした。四十九になって初めて書いた小説でした。それがたまたま注目され、そしてサイゴンの監獄生活の話を書いた二つ目の小説「プレーオー8の夜明け」で芥川賞を受賞したために、横すべりした形で職業作家ということになりました。しかし、小説というものは自分を豊かにするために書くものであって、読むこともまたそうです。決して、はなやかなものではなく、いわば、関西の言葉でいえば、シンドいものなのです。しかし皆さんに「お書きなさい」「書いてもらいなさい」ってすすめたいような気がします。もちろん、職業作家になるためにチャレンジしてみるのも一つの人生で、それはそれでいいでしょう。ただ職業作家をめざす方がいたらアドバイスしてお

きたいことは、人と同じ生半可なことをやっていたんではいけない、人のやらないことをやらなければ絶対になれないということですよ。

小説は紙と鉛筆があればだれだって書けますし、人間の才能は大体レベルは似たようなものですから、よほど運のいい人でないと抜擢されませんし、そこを突破するには人より余計にものを考えなければなりません。人のやらないことをやるという技術的にむずかしい問題がありますが、それをやったらなれるかというところ、運が悪ければならない。それに挑戦してみるのもいいでしょう。しかし、そういうことではなくて、小説でも詩でも歌でもいい、自分のためにものを書くということも、私は大事だと思います。

世の中の職業には、虚業と実業というものがあります。お米を作ったり石鹸をこしらえたりするのは実業です。歌を読んだり絵を書いたりするのは虚業といたらいでしょうか。

実業、虚業という分け方をしているかどうかかわからないけれども、小説などは、要するに無ければ無くてすむものなんですね。米や油がないと、人はとたんに困りますが、小説は無ければ無くて生活に困るといえるものではない。しかし、俗に「人はパンのみにて生くるにあらず」といいますが、無ければ無くて生きてゆかれるものの中に、自分というものが表現されてゆくわけです。それが人間の世界というものです。ですから「無くてもいいものが無ければならない」という理屈になってくる。そういう意味で文学を大事に考えていただきたいと思えます。そういうつもりで小説を書く人は書けばいいし、書かないまでもそういう意味で作品を読めば、また新しい読み方ができるのではないかと。そんなことを私は考えております。(昭和六十一年六月二十八日、第二十一回・文芸学会の講演から)